

薬物使用障害に関する投影法を用いた研究の概観

松井一裕¹⁾ 河野莊子²⁾ 森田美弥子³⁾

問題と目的

わが国に比べて薬物の蔓延率が高い海外においても、薬物使用障害の投影法研究は、他の精神障害対象のものに比べて、少ないとされている (Vanem, P.-C., Krog, D., & Hartmann, E., 2008)。本研究では、薬物使用障害の投影法研究に関する国内外の文献を調査し、薬物使用障害をめぐる概念の変遷と国内外の薬物の流行状況を俯瞰したうえで、現状の課題を探りたい。

薬物使用障害をめぐる概念

物質使用と嗜癖に関する領域では依存 (dependence) や中毒 (intoxication), 乱用 (abuse) など様々な疾患概念が使用されている。疾患概念の歴史的な変遷は複雑なため、ここでは簡単に物質使用と嗜癖の障害に関する領域で使用される概念についてまとめたい。

World Health Organization (1957) (以下 WHO) によれば、嗜癖は (天然のあるいは合成の) ある薬物の繰り返された消費によってもたらされる断続的、慢性的な状態とされ、(1) その薬物を継続的に使用し続けたいという非常に強い欲求 (衝動) と、どのような手段でも手に入れたいという非常に強い欲求、(2) 使用量が増加する傾向、(3) 薬物の作用による精神的 (心理的) 依存および身体的な依存、(4) 個人および社会に対する有害な作用によって特徴づけられる。また、習慣については、ある薬物の繰り返された消費の結果として生じる状態であり、薬物を使い続けたいとの欲求はあるが、使用量の増加は見られない点、薬物を断っても身体依存は生じないといった点で特徴づけられている。しかし、柳田 (1975) によればこの嗜癖と習慣を提案した WHO の試みは失敗であった。その理由を、加藤・吉野・和田・洲脇 (1993)

は以下に挙げる三点が後に明らかになったからだとしている。一つには耐性や身体依存が明確でない依存性薬物が存在した点、第二に、身体依存は薬物の直接的な薬理作用の結果によって変容した生理学的状態である点、そして第三には、患者に慢性疼痛治療のため大量のモルヒネを使用しても身体依存は生じるが、精神依存に陥るとは限らない点であり、提唱された嗜癖と習慣の概念には課題があった。WHO の定義以降は、嗜癖・中毒・乱用・依存といった用語が十分に区別されないまま使用されていたが、依存という用語が1977年にEdwardsらのWHO専門部会で科学的用語として推奨された (洲脇, 2004)。松本 (2011) によれば、Edwardsらはアルコール依存とアルコール関連障害という2つの概念に分け、アルコールに関連して生じる問題の基底に、アルコールの慢性的な過量摂取によって生理的な水準で生じる「依存」という病態が存在するとした。また、Edwardsらはアルコール依存を行動面・精神面・身体面の3つの次元に及ぶ一連の特徴的徴候から構成される症候群として捉え、「アルコール依存症候群」と命名した (松本, 2011)。Edwardsらの定義は、アルコール以外の他の依存性物質も含めた物質依存臨床に影響を与え、ICD-10 (World Health Organization, 1992 融・中根・岡崎・大久保監訳 2005) の「依存症候群」DSM-IV (American Psychiatric Association, 2000 高橋・大野・染矢訳 2002) の「依存」という2つの診断基準に引き継がれるだけでなく、それまで使用されていた「嗜癖」、「中毒」、「乱用」の概念とを分けた (松本, 2014)。嗜癖はこの定義の時期に、一時的に死語となり (加藤ら, 1993)、中毒は診断基準に組み込まれていく。中毒には「急性中毒」と「慢性中毒」があり、急性中毒が「アルコールあるいは精神作用物質の投与に続いて、意識水準、認知、知覚、感情か行動、あるいは精神生理的な機能と反応の障害が一過性に生じた状態 (World Health Organization, 1992 融・中根・岡崎・大久保監訳 2005, p85)」と一過性の現象を指している。慢性中毒は、飲酒による肝硬変や喫煙による肺がんなど、「原因薬物の摂取を中止しても、原則的に

- 1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 河野莊子教授)
- 2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- 3) 中部大学人文学部

薬物使用障害に関する投影法を用いた研究の概観

自然には元に戻らない状態」を指す（和田, 2000, pp. 7）。乱用に関しては、「物質の反復作用に関連した好ましくない結果が、反復的かつ著明に起こるという不適応的な物質使用様式」とされている（American Psychiatric Association, 2000 高橋・大野・染矢訳 2002, pp. 197-198）。しかし、依存症と分けられたこれらの概念も、依存の状態と混同して使用されることがあった。例えば柳田（1992, pp. 97）は、「『中毒』が本来は化学物質が体内に摂取された結果起る生体にとって不利あるいは危険な状態を指すにもかかわらず、麻薬中毒やアルコール中毒など薬物摂取への欲求状態（精神依存）や生体の機能的適応状態（身体依存）にまで拡大して当てはめようとした」としており、依存を中毒の表現で扱う点に疑問を投げかけた。

そして、2013年に改定されたDiagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition（以下DSM-5と表記）では重大な変更がなされた（American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014）。DSM-IV-TRの物質乱用と物質依存の概念が統合され、新たに物質使用障害の概念が採用された。また、使用障害の基準を満たした数により、重症度が特定できるようになった（和久田, 2014）。DSM-5ではギャンブル障害

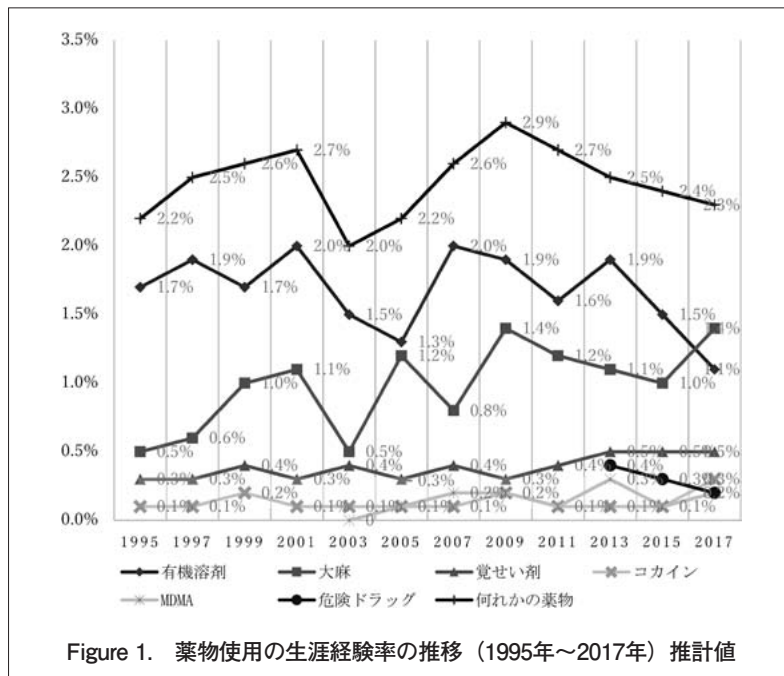
を診断カテゴリー（「物質関連障害および嗜癖性障害群」）の中に組み込んでいる。依存の概念は生理学的な反応を伴う身体依存を中心に発展してきた経緯がある。このため、問題物質の摂取によって生じたものではない、行為嗜癖であるギャンブル障害にそのまま用いることは難しく、再び嗜癖という用語が採用されている。

わが国の薬物蔓延状況

わが国では違法薬物の流行の歴史は浅く、戦後に覚せい剤の大規模な流行が見られたことが、わが国が初めて経験した薬物による社会問題だった。1945年に第二次世界大戦が終わり、戦時中に医薬品として用いられていた覚せい剤が市場に流出した。この時期は覚せい剤第一次乱用期（1945年～1957年）に該当しており、経済不況を背景とする第二次覚せい剤乱用期（1970年～1994年）、そして1995年以降のバブル景気の崩壊から現在に至るまでが覚せい剤第三次乱用期に該当する。

わが国での流行として、近年特筆する薬物に「危険ドラッグ」がある。この薬物は、「脱法ハーブ」や「違法ハーブ」など様々な呼称が用いられていたが、厚生労働省が2014年に、正式に「危険ドラッグ」と名称を統一した。

最近のわが国の薬物情勢はどのようなものになってい



（嶋根卓也・邱冬梅・和田清（2018）. 薬物使用に関する全国住民調査（2017）. 平成29年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究（研究代表者：嶋根 卓也）」分担研究報告書, pp134. Table33より一部変更）

るか、過去5年の蔓延状況を以下にまとめる。まず、近年の違法薬物の流行状況を国立精神・神経医療研究センターが実施した内容（和田・邱・島根，2014，島根・大曲・和田・邱，2016，島根・邱・和田，2018）を基に概観する。同センターでは、2年に一度薬物の生涯経験率を全国調査している。調査年ごとの推移をFigure 1. に示す。ここ数年の推移を見ると、有機溶剤、大麻、覚せい剤、危険ドラッグ、コカインがわが国において生涯経験率の高い薬物であることが分かる。

また、精神科医療現場における薬物関連疾患の実態把握も隔年ごとに報告されている。全国の精神科臨床を有する医療施設において、入院あるいは外来で診療を受けた、「アルコール以外の精神作用物質を使用した薬物関連（使用）精神障害患者」を対象とした2012年の調査（松本・立森・谷淵・高野・和田，2013）では、848事例が該当した。その中で、対象者の1年以内の「主たる薬物（現在の精神的症状に関して、医師が臨床的に最も関連が深いと判断した薬物）」は、覚せい剤（42.0%）が最も多く、脱法ドラッグ（当時の名称。現在は危険ドラッグに該当）（16.3%）、睡眠薬・抗不安薬（15.1%）、有機溶剤（7.7%）、多剤（7.0%）の順で多かった。2014年の調査（松本・高野・谷淵・立森・和田，2015）では「過去1年以内に主たる薬物の使用が認められた者」1,019例中、危険ドラッグ355例（34.8%）が最も多く、次いで覚せい剤279例（27.4%）との結果が出ており、精神科臨床場面で危険ドラッグを使用する事例が急増していることが読み取れる。ただし、危険ドラッグ問題は2017年の調査では減少している。「1年以内使用あり」事例1164例のうち、覚せい剤875例（75.2%）、揮発性溶剤501例

（43.0%）、大麻320例（27.5%）、睡眠薬・抗不安薬207例（17.8%）、危険ドラッグ171例（14.7%）、コカイン98例（8.4%）であった（松本・伊藤・高野・谷淵・船田・立森，2017）。

現時点（2018年）では国民の問題薬物の生涯経験率は大麻が最も高いと考えられるが、精神科臨床の場面では覚せい剤が問題となっていることが分かる。大麻の使用人数は多いことが推定されるが、薬物関連問題が生じやすく医療的な介入が必要となる物質は覚せい剤といえる。このなかでも、覚せい剤を使用した者の高齢化が顕著である。島根他（2018）の2017年の調査時点では、覚せい剤例の平均年齢は44.5歳となっており、2013年の調査時点（和田他，2014）の40.1歳よりも平均年齢が上昇していた。福井（1993）は第二次覚せい剤乱用期に、40代の使用者が増加したことが、覚せい剤を使用する者が高齢化した一因と述べている。また福井は、覚せい剤再燃例に高齢の者を認めたとしている。一方、松本他（2017）は、薬物を調査時点で使用している98例は「かつて危険ドラッグを主たる薬物として使用し、現在は他の薬物を主たる薬物として使用している」事例であり、その4割あまりが現在は覚せい剤を乱用していたことを報告している。安価で入手しやすい危険ドラッグ使用者の何割かが、その後、覚せい剤を使用するのだとしたら、危険ドラッグに注目することは、薬物使用の連鎖を減らすためにも、非常に意義があると思われる。

海外の薬物蔓延状況

海外ではわが国と比べた薬物の生涯経験率はどのようになっているのか、主な国々のデータを示す（Table 1.）。

Table 1 主な国々の違法薬物生涯経験率（%）

	対象年齢	何らかの違法薬物	大麻	覚せい剤 ^{※7)}	コカイン	MDMA	ヘロイン	調査年	出典
日本	16-64	2.3	1.4	0.5	0.3	0.2	該当者なし	2017	※1)
アメリカ	12歳以上	48.5	44.0	5.4	14.4	6.9	1.8	2016	※2)
オーストラリア	14歳以上	43	35	6.3	9.0	11.2	1.3	2016	※3)
イギリス	15-64		29.6 ^{※6)}	9.2	9.7	9.0 ^{※6)}		2015	※4)
フランス	15-64		41.4	2.2 ^{※5)}	5.4	4.2		2016	※4)
ドイツ	18-64		27.2	3.6	3.8	3.3		2015	※4)

※1) 島根他（2018）

※2) Center for Behavioral Health Statistics and Quality（2017）

※3) Australian Institute of Health and Welfare（2017）

※4) European Monitoring Centre for Drugs and Drug Addiction（2018）

※5) 2014年のデータ

※6) 2016年のデータ

※7) 日本とアメリカはメタンフェタミン、イギリス・フランス・ドイツはアンフェタミン、オーストラリアは両者を含む

和田 (2015) が述べているように、世界各国の違法薬物の生涯経験率の多くは大麻によるものである。アメリカの大麻生涯経験率44.0%やオーストラリアの34.8%に比べて、日本は1.4%とかなり低い。その他の薬物でも、わが国は大麻以外が総じて1%以下の物質が多いが、他の国々は複数の薬物の障害経験率が5%以上かそれに近い数値を示しており、多様な薬物が蔓延していることが読み取れる。海外で危険ドラッグに該当するNew and Emerging Psychoactive Substances (NPS) の生涯経験率はオーストラリアの例では2013年の時点では0.4%だったが、2016年では1.0%であり、少なくとも2016年の時点では増加傾向にあった (Australian Institute of Health and Welfare, 2017)。

違法薬物の有害作用と精神症状：覚せい剤と危険ドラッグを中心に

脳内には、快感や多幸感、陶酔感といった好ましい感覚に関連する、「脳内報酬系」と呼ばれる神経回路がある。薬物はこの脳内報酬系に作用し、活性化させる。薬物への依存の形成は、脳内報酬系の中脳辺縁ドーパミンが重要な役割を果たしていることが明らかになってきた (船田, 2014)。特に、覚せい剤はドーパミン神経終末に作用し、シナプス間のドーパミン量を増加させ、精神症状が出現することが知られている (橋本, 2007)。伊予・山崎 (1992) は、コカインや覚せい剤は末梢神経や血管系に血管の収縮を引き起こすため、壊死性血管炎を伴うくも膜下出血を引き起こすとしている。

危険ドラッグは大きく分けて中枢神経系の作用により、合成カンナビノイド系化合物、カチノン系化合物、トリプタミン系化合物、合成オピオイド系化合物に分けられる (谷淵・松本, 2015)。危険ドラッグは様々な合成薬物が添付されており、含有量が不明な「闇鍋」状態 (上条, 2015) であり、脳神経系に与える影響は明らかになっていないが、危険ドラッグに含まれる成分は、ヒトの脳神経系において強力な毒性を発現させる危険性がある (船田, 2016)。2014年には危険ドラッグが関連した自動車事故が発生したことが知られているが、危険ドラッグ (合成カンナビノイド) は大麻同様に、運動技能に問題を生じるとしており (Musshoff et al., 2014)、注意や集中といった精神機能に影響を与える恐れがある。

薬物使用障害に対する心理的アセスメント研究とロールシャッハ法の活用

薬物使用障害の人格傾向に関する研究には、大澤・石川・幸田・高澤 (2004) がある。大澤他は、質問紙を用いた病理的特徴に基づく自己愛に関する尺度とミロン臨

床多軸目録境界性スケール17項目短縮版を用いて、薬物使用障害者に自己愛人格傾向と境界例人格障害の特性の度合いを測定したところ、薬物使用障害者の自己愛得点は一般大学生よりも高く、境界性得点は精神科外来で人格障害及び近縁疾患と診断された患者より高かったとしている。ロールシャッハ法はWeiner (1998 秋谷・秋元訳 2005) によれば、注意・知覚・記憶・意思決定・論理的分析の改訂を含む認知構造を測定しており、また連想・属性・象徴化の過程を含むテーマ的イメージを測定している。薬物使用障害に対してロールシャッハ法を用いて分析することによって、認知構造とテーマ的イメージという2つの側面から薬物使用障害者のパーソナリティの機能が明らかになると考えられる。本研究の成果は、ロールシャッハ法から個人の認知能力を査定するための資料となるだけでなく、薬物使用障害の固有のテーマ性を読み取る手がかりを見出すことができれば、薬物使用障害を抱える個人へのアプローチの一つとなりうる。

方法

- 1) 片口 (1987) の『新・心理診断法』に掲載されている「本邦ロールシャッハ関係文献一覧」を参考にし、掲載されている題目から薬物使用障害を扱っていると考えられる邦文の文献を選定する。
- 2) 日本語文献に関しては、データベース Citation Information by NII (Cinii) を用い、「ロールシャッハ」のキーワードに、「薬物乱用」、「覚せい剤 (覚醒剤)」、「有機溶剤」、「大麻」、「抗不安薬」、「危険ドラッグ」、「コカイン」、「麻薬」のそれぞれの単語を組み合わせて検索した。英語文献に関しては、PubMed を用いて検索した。“Rorschach”の単語に“substance abuse”, “amphetamine”, “methamphetamine”, “volatile”, “cannabis”, “benzodiazepine”, “new psychoactive substance”, “cocaine”, “heroin”のキーワードを組み合わせて検索した。これらの検索で表示された結果のうち、薬物使用障害に関連していると思われる文献を対象とした。

結果

今回の対象となる文献は、38編の文献が該当した。内訳として、1) 『新・心理診断法』に掲載され対象となる邦文の文献は13編であった。このうち、論文の抄録の紹介を中心にまとめている2編を除外し、11編を対象とした。2) データベースの検索によって本研究の目的

に該当した文献が、21編であった。邦文文献は3編、国外の文献は18編であった。また、これ以外に筆者が独自の選定を行った邦文の文献6編を加えた。なお、薬物問題に関連する「乱用」や「嗜癖」、「中毒」といった用語や物質名は記載されている当時の名称を用いて表記した。なお、過去の文献において「精神分裂病」と記載がされているものに関しては、統合失調症の名称として本論文では扱う。

国内の薬物使用障害に対するロールシャッハ法研究

日本語での薬物使用障害に対するロールシャッハ法研究文献は、20編が該当した。これらの先行研究を主に問題となる薬物名別に概観する。

先行研究の中では、覚せい剤が7編で最も多かった。1950年代から1960年代にかけては、郡(1954)、栗林(1955)、高橋(1958)、後藤(1960)といった複数の研究が見られる。この時期は、戦後に軍部から流出した覚せい剤が日本に蔓延した第一次覚せい剤乱用期を反映した研究であるといえる。栗林(1955)は予後を評価する指標であるPiotrowskiの予後診断的知覚分析指標(Piotrowski & Lowis, 1950)を用いて覚せい剤アミン中毒患者(60名)と一般健常群(30名。27.77±3.86歳)、精神分裂病(統合失調症)群(26.13±7.29歳)の比較を行った。この予後診断的知覚分析指標は、予後良好であった統合失調症の患者のプロトコルに高い頻度で見られた12個のサインと、予後不良の統合失調症の患者によく見られた3個のサインの、計15個から構成されている。覚せい剤アミン中毒群は精神症状のないA群、幻覚、妄想があっても治療によって2~3ヵ月で症状が消失したB群、慢性の統合失調症とよく似た症状を示したC群の3群に分けられた。A群は一般健常者群よりも予後診断的知覚分析指標の平均値が有意に低かった。B群は精神症状を有していたにも関わらず、A群に近い得点を示していた。C群の平均得点は統合失調症群と同程度に低く、B群よりも有意に低かったが、統合失調症群と有意差を認めなかった。

1980年代に入ると、松岡・廣瀬(1986)、小川(1987)による事例報告がなされている。この時期は第二次覚せい剤乱用期である。松岡・廣瀬(1986)の覚せい剤使用が疑われる事例にロールシャッハ法およびカロ・インク・プロット・テストを用い、反応内容の分析や統合失調症および詐病との鑑別を試みている。そして、著しく不合理な逸脱言語表現がない点、単純な反応の繰り返しがないこと、萎縮によるP反応がないことから、統合失調症とは考えにくい、としている。小川(1987)は40代の覚醒剤中毒精神病のロールシャッハ法の事例を報告して

いる。事例では、F+% = 50%、R+% = 45%と現実吟味力は弱く、原始的な防衛機制である分裂や価値下げが認められた。事例では人間反応が多く、不良形態反応は人間運動反応のみに生じており(M-反応)、現実を無視した反応(F-反応)は認められないことから、認知の焦点付けが問題となる統合失調症とは区別されると報告している。覚せい剤を対象とした研究で最も新しいものは、梅本(2005)の覚せい剤を使用し少年院に入院し、猜疑的な言動や幻覚・妄想などの精神症状を示していた群(A群)と精神症状が見られなかった群(B群)とを阪大法を用いて比較した研究がある。両群ともに内的・外的統制が不良で、A群は妖怪・幽霊・悪魔・お化け・魔法使いに示される(H)反応が多く、F(-)%が高いことや、W反応やfire, blood, food, Antの反応が多く、対人関係の問題や現実吟味の問題、退行的になりやすく衝動的な行動や敵対的・攻撃的な行動化が起りやすい特徴が見られた。B群は、A群ほど(H)反応は見られず、fire, blood, food, Ant反応もA群ほど多くない代わりに、LDS, arch, Na, cloudなどの反応が多く出現していた。運動反応の多さや色彩反応、(H)反応の多さは覚せい剤の影響が、W%の高さや文章型でAS>CSの傾向にある点やfood反応が多い点は一般の非行少年の特徴を示していると考えられ、A群は覚せい剤による対人関係での過敏さが、B群はA群と一般少年との中間の特徴が見られたとしている。ただし、この研究が公表されたのは2000年代に入ってからとはいえ、梅本の対象とした覚せい剤の臨床群は、1981年から1984年までを調査期間としたものである。そのため調査結果は、第二次覚せい剤乱用期の情勢を反映したのものであると考えられる。

覚せい剤に次いで、有機溶剤に対するロールシャッハ法研究が5編と多かった。有機溶剤は、同薬物を用いた、いわゆる「シンナー遊び」が1960年代後半に社会問題化し、島根他(2018)の調査の時点で大麻が上回るまで「最も生涯使用率が高い」薬物であった。小田(1969)はシンナー依存の見られたものを、共同型(つねにグループで吸引し単独では吸引の体験がないもの;18名)と単独型(単独で吸引した体験のあるもの;17名)に分け、精神症状およびロールシャッハ法のスコアリングの比較を行った。単独型は、より内向的で、非現実的・空想的で現実の社会適応性が不良で、外的には受身消極的で内的な不安が高かった。これは、単独型がより幻覚体験を高率に持ち、酩酊時の気分が不安、猜疑的になりやすいことや、無力感や無気力感を抱きやすかった点と対応していた。

こうした有機溶剤を使用した人物が抱く無力感や無気力感に関する点や、活動性が低い点は、運動反応の乏し

さという形で他の研究からも明らかになっている。郷古(1977)は劇物取締法以降、有機溶剤の乱用が犯罪化された後に有機溶剤を乱用した少年群の特徴として、F優位でP%が高く、反応の明細不全化が認められ、自律性のなさや内省力のなさだけでなく、人間運動反応も少なかったと指摘した。山脇・嶋谷・津久(1982)も、入院中の有機溶剤乱用者16名(男14名、女2名)の特徴として人間運動反応が0か1を示す場合が9割程度であったと報告しており、馬場・門倉・牛島(1999)は有機溶剤嗜癖の事例に精神症状出現時と症状消失後にそれぞれロールシャッハ法を実施したところ、総反応数は出現時に10個、消失後に15個であり、M:FMも出現時2:1、消失後1:1であったことから、有機溶剤を乱用した人物の精神エネルギーの乏しさを指摘している。小林他(1995)は、有機溶剤乱用を主訴として、単科精神科に通院または入院している患者26名(男子21名、女子5名;平均年齢17歳11か月)を対象とし、健康意識調査票とロールシャッハ法を施行した。健康意識調査からは、不安感情や罪意識、無力感(記銘力低下、睡眠障害、全身倦怠感、体力・気力の衰え)があり、身体症状としては口渇、めまい、立ちくらみ、便秘・下痢が見られた。一般健常者と有意差の見られた項目は、反応数、人間運動反応、動物運動反応、無生物運動反応、通景反応(FK)、材質反応(Fc)、良形態出現反応(R+%)、反応内容の幅(CR)、防衛反応(Br)、視線反応(Eye)、BRSだった。先行研究(郷古, 1977)を支持する内容で、自我エネルギーが低下しており自我機能の未成熟、人格統合水準の低さ、自己受容の乏しさ、現実吟味能力の低下や衝動性のコントロールの脆弱性が認められた。一方で、無力感や劣等感を自覚しており、自己像からの逃避や高揚感を求めて嗜癖行動をするのではないかと考察している。

3番目に多かったものはヘロインやモルヒネなどが含まれる、オピオイド(アヘン類)を対象とした論文で、4編が該当した。該当した日本語論文ではヘロインといった物質名よりも、麻薬の名称が用いられていることが多かった。このうち、空井(1973, 1975)の研究は同様の内容であるため、関(1964)と細木・村田・滝沢(1966)の研究を合わせ、実質3編が該当する。関(1964)は麻薬中毒中絶の目的で入院した24名と、刑務所収容中の麻薬嗜癖経験者30例について人格特性を総合的に考察した。ロールシャッハ法(入院者24名に実施)からは社会的・個人的適応の欠陥、情緒統制の困難性、抑うつ気分・防衛的態度が見られた。総反応数の平均は男性の平均が17で、女性が19、女性ではFM:Mが1.7:1.6であったのに、男性では2.8:1.6であった。A%は全平均で54.2%(男47.4%、女61%)と高かった。F%は男

性平均48.6%、女性平均53.6%で、F+%は全平均60.6%(男性56.2%、女性平均64.9%)であった。空井(1973, 1975)は、麻薬常用者で他の犯罪経歴が少なく精神障害を持つ受刑者25名(平均年齢32歳)の嗜癖者群と麻薬嗜癖の経験がなく、精神障害のない受刑者25名(平均年齢28歳)の統制群を比較したところ、色彩図版での反応時間の遅れや、1分以上の反応時間の出現数が嗜癖者群では有意に多かった。F+%が65%未満のものや、R+%が80%以下のものも嗜癖者群には多いことだけでなく、Dm%(異常部分反応+空白反応/総反応数×100)が欠如したものも多かった。空井は、麻薬嗜癖者は情緒刺激に回避的で現実から逃避しがちで、Dmを欠如し反抗的傾向をパーソナリティに保持していると結論づけた。

その他の薬物としては、ブタンガスの事例を報告した安倍(1981)、五味淵(1992)の研究が挙げられる。五味淵(1992)は、ブタンガスを使用し入院した事例を報告しており、W反応優位、CF反応優位、F+%の低下、M反応は少なく共同運動がない、反応内容は(H)や「影」、非現実的な反応が多く、プロットの対称性へのこだわりが見られただけでなく、質疑段階で自発的追加反応が多くなったこと、検査者に説明してわからせようとする態度が乏しく、自分の思いつくままに流れていく傾向も認められたとしている。加えて、プロットに対しての注意持続時間が短く、瞬間、瞬間で反応が変わってしまう点も特徴として挙げられている。その他には、松岡(1986)は喘息薬嗜癖の入院女性患者にロールシャッハ法とMMPIを実施した事例報告をしており、事例の生活歴、事例が実際に描いた絵画の内容と、事例のロールシャッハ法の反応内容とを照らし合わせて事例の理解を試みている。近年では、松井(2018)の危険ドラッグを使用した入院患者の事例報告がある。危険ドラッグの使用者には、R+%の低さやFM反応、m反応が見られない点、名大法の思考・言語カテゴリーではArbitrary ThinkingやAssociative Debilitation and "Labile Bewufstseinslage"が出現しており、恣意的思考や連想過程の問題が認められたとしている。

これらの本邦の薬物使用障害に対するロールシャッハ法研究のほとんどは2000年代以前の研究であり、2000年以降の研究は2編のみとなっている。また、使用者が多いと推定される大麻を使用した例に対するロールシャッハ法研究はなされていない。

海外の薬物使用障害に対するロールシャッハ法研究

海外での薬物使用障害に対するロールシャッハ法研究文献は、18編が該当した。本邦の論文同様、以下に先

行研究で中心的に扱っている薬物名別に概観する。

ヘロインやモルヒネに代表されるオピオイド（アヘン類）に関連した薬物を主に扱った論文は、7編が該当しており、最も多かった。Silverman & Silverman (1960) は、ヘロイン嗜癖のある30名（平均年齢19.8歳。17歳から27歳）と、犯罪歴のある薬物未使用者30名（平均年齢18.9歳。16歳から26歳）の比較をし、ヘロイン嗜癖のある群は水に関する反応が多く、この背景には子宮に関する空想を抱いていると考察している。オピオイドに関連した薬物へのロールシャッハ法研究の中でも、Cipolli & Galliani (1987, 1988, 1990) によるヘロイン短期使用者と長期使用者を対象とした研究がある。Cipolli & Galliani (1987) はヘロイン嗜癖のある群を短期使用群（平均21歳。ヘロイン使用1~2年）、長期使用群（平均23歳。ヘロイン使用4~5年）、ヘロイン使用のない未使用群（平均21歳）各15名を比較し、ヘロイン使用による知的な機能の影響を調べたところ、F+反応はヘロインを使用した2群が未使用群より有意に多く、Anat%は長期使用群が未使用群よりも多かった。ヘロイン嗜癖者の知的機能の問題が示唆され、長期使用者にAnat%が多いのは、ステレオタイプの見方と不安があると考えられた。Cipolli & Galliani (1988) は短期（1年から3年）および長期のヘロイン使用者（5年以上）の各20名のプロトコルをM-反応とFM反応を中心に検討した。M-反応とFM反応は短期ヘロイン使用者群と長期ヘロイン使用者群での比率は同程度であったが、M-反応を有する短期および長期のヘロイン使用者は、confabulationおよびcontaminationのM-反応を伴わない使用者より、それぞれの群に占める比率が多く、有意に高かった。さらに、Cipollo & Galliani (1990) はヘロイン短期使用者25名（1から3年）と長期使用者25名（5年以上）を知的活動の複雑さと水準を示すZf（組織化活動の頻度）と情報を認知的に適切な形で処理する能力を示すZd（情報の効率的な組織化）の指標を用いて比較した。Zfが40%を下回るものは、短期使用者群では32%、長期使用者群では68%で、Mann-Whitney testの検定を用いたところ有意差が見られた。Zdが3以下の者は短期使用者で20%、長期使用者で68%となっており、有意差が認められ、ヘロインの長期使用によって認知機能の損傷が生じるとした。

Blatt, et al. (1984) やBlatt & Berman (1984, 1990) による麻薬使用者のロールシャッハ法研究も行われた。中でも、Blatt & Berman (1990) は麻薬嗜癖者53名にクラスター分析を行い、それぞれ特徴のある3群に分類した。思考障害や現実検討の問題はほとんど認められないが、感情の不安定性と対人概念化の問題がある群、活動性と

対人関係に問題のある群、活動性は低い思考障害は認められない群のあることを導き出した。この研究では、薬物を使用した者の中でも、異なる特徴をもった群が存在しており、それぞれに見合ったアプローチが検討される必要があることを示唆している。

オピオイドに関連する薬物の論文に次いで、コカインに関する論文が、4編と多かった。Dougherty & Lesswing (1989) は100名（平均年齢27.8歳。平均教育年齢は11.7年）のコカイン乱用者に、各種の心理検査（WAIS-R, Shipley Institute of Living Scale, MMPI, Millon Clinical Multiaxial Inventory, Rorschach, and Beck Depression Inventory）を実施し多面的にパーソナリティを考察している。WAIS-Rの平均IQは96で平均的であった。MMPIでは第4尺度や第9尺度の高い数値が特徴づけられ、低いフラストレーション耐性や衝動統制を示しており、すぐに満足を求める傾向や興奮、衝動性が見られ、Million Clinical Multiaxial Inventoryでは、88%にDSM-IIIのパーソナリティ障害が認められた。ロールシャッハ法では、自己愛傾向や怒り、現実検討の低さが認められた。Lesswing & Dougherty (1993) はアルコール依存症群94名とコカイン依存症群99名をShipley Institute of Living Scale, MMPI, Millon Clinical Multiaxial Inventory-II (MCMI-II)、ロールシャッハ法、ベック抑うつ尺度を用いて比較した。アルコール依存症群の方がコカイン依存症群よりも平均年齢が高く、教育歴も高かった。アルコール依存症群は、ベック抑うつ尺度の平均得点がコカイン依存症群よりも有意に低く、知的な機能が優れているだけでなく、明らかに現実検討力があり、感情の統制も良好であったとしている。ただし、ここでロールシャッハ法の具体的な変数に関する記載は見当たらなかったため、著者がどのようにこの結論を導いたのかは不明である。Pinheiro, et al. (2001) は入院あるいは治療中のコカイン依存の患者（67名）とその両親、コカイン依存群の患者の年齢、社会階級とマッチングを行った統制群（67名）とその両親にロールシャッハ法を実施し、Lerner Defense Scaleを用いて比較を行った。この尺度は、スプリッティングや投影性同一視といった原始的防衛機制を測定するものであり、著者はコカイン依存の家庭の防衛機制のあり方と家族機能を明らかにした。そこでは、コカイン依存群は、原始的防衛機制の尺度が分裂 (splitting)、投影性同一視 (projective identification)、否認 (low Negation (type 3)) 理想化 (moderate Idealisation (type 2))、脱価値化 (moderate and low devaluation (type2 and 3; 5)) で有意に健常者群よりも高かった。コカイン依存群の子どもと、とりわけ父親の反応について、各尺度に相関が認められ、父親

とコカイン依存となった子どもの原始的防衛機制は同質的な特徴をもって関連していた。また、Pinheiro, et al. (2008) では、治療共同体のコカイン依存症と診断された男性患者 (102名) に断薬7週間後に包括システムを用いてロールシャッハ法を実施したところ、エクスマーの標準サンプル (175名) と比べ、総反応数が高く、 Λ , 対処不全指標 (CDI) で有意差が認められた。

このほか、調査対象に複数の薬物の記載のある論文が2編見られた。Tori (1990) は、同性愛者と異性愛者のロールシャッハ法を比較した。アメリカに不法滞在していた同性愛者とメキシコ居住の同性愛者と、アメリカに不法滞在していた異性愛者の3群を比較し、同性愛者は異性愛者に比べて全般的に薬物乱用率が高い傾向があった。アメリカに不法滞在した群は有機溶剤が、メキシコ居住の同性愛者群は幻覚剤と鎮痛剤の使用が高かったとしており、抑うつや自殺の可能性を示す特殊指標が、同性愛の2群は異性愛群よりも有意に高かった。Tucker et al. (1972) は薬物の使用の長さ、種類の関係と思考との関係について調査した。長い薬物使用歴を有する薬物使用者は、重度の思考障害を示しており、薬物使用の量および変動は、これらの有意な相関を示さなかったとした。

その他の物質を対象とした研究には、覚せい剤が1編 (Templeton & Spruiell, 1958), バツピツール系睡眠薬1編 (Kornetsky, 1954), 多剤および鎮痛剤を乱用した者と未使用者を比較し、多剤乱用者はEA<ep, FC<CF+Cの傾向が他の2群より見られたとする研究が1編 (Gordon, L.B., 1980), LSDの使用頻度と自我機能の比較を行った研究 (Axelrod, & Kessel, 1972) が1編ある。

その他特に薬物の種類の記載がない論文が1編あった。Vanem, P.-C., et al. (2008) は、薬物使用障害群 (60名) と統合失調症群 (36名), 大学生群 (60名) を、認知と知覚の障害 (M+, o, u%, XA%, X-%, WSum6Lv2%), 対人関係の障害 (M-%, SumT%, PureH%), 感情表現の障害 (CF+C-FC) の3つの視点から比較した。認知と知覚の障害では、薬物使用障害者群は大学生群と比べてX-%, WSum6Lv2%が有意に高く, M+, o, u%, XA%は有意に低い結果であったが、統合失調症群と比べるとM+, o, u%, XA%は有意に高く, X-%, WSum6Lv2%は有意に低かった。このことから、薬物使用障害群は、統合失調症群よりも重篤ではないが大学生群よりも認知や知覚の障害を持っていた。対人関係の障害では、薬物使用障害群は大学生群に比べてM-%が有意に高く, SumT%, PureH%が有意に低かった一方、統合失調症群に比べてSumT%, PureH%は有意に高かったが、M-%は有意差はなく、重篤な対人関係の障害を薬物使用障害は抱えていることが示唆された。ただし、この研究からは薬物使用障害群が

どのような薬物を使用していたのかは、明らかにされていない。

海外のロールシャッハ法研究においては、日本では流行していないコカインを扱った論文が多数見られていることや、薬物を使用した期間を想定していること、多様な指標を用いた研究がなされていることが特徴として見られた。

これまでの先行研究の問題点と課題

国内外の投影法の研究を概観すると、使用された物質によって違いはあるが、薬物使用者は、思考障害を伴っており、対人関係の問題や現実吟味の問題を抱えている点が共通していると考えられた。使用された物質により、ロールシャッハ法に表れる反応のあり方にも特徴がある。例えば覚せい剤の例においては、小川 (1987) は現実を無視した反応は認められず、認知の焦点付けが問題となる統合失調症とは区別されるとしているが、ブタンガスの例で五味淵 (1992) はプロットへの注意持続時間の短さと反応の変容を問題点として挙げている。使用された物質による影響の違いがあり、情意面や思考の問題を生じさせる覚せい剤では人間反応の非現実的な内容や不良形態を伴う人間運動反応など対人関係上の問題が認められ、意識水準に強い影響を及ぼすブタンガスでは、認知や注意の問題が表れている。もし認知や注意の問題が意識変容を生じさせる薬物を使用した者のロールシャッハ法に生じるのであれば、ブタンガス同様、意識変容をきたす恐れのある危険ドラッグの使用者にも、何らかの認知や注意の問題を示す反応内容が出現する可能性がある。ただし、Tucker et al. (1972) やCipolli & Galliani (1990) が薬物使用歴の長さが思考障害や認知機能の障害に影響を与えている点を指摘したように、物質の種類だけでなく、どの程度の期間薬物を使用していたかも考慮する必要がある。

全国調査の経過からは、覚せい剤使用者の高齢化が進み、遅延し再燃を繰り返していることが推察される。わが国での覚せい剤使用障害に対するロールシャッハ法研究は、第二次覚せい剤乱用期までの研究はなされているが、それ以降を調査期間とした研究は報告がない。現在の第三次覚せい剤乱用期にあたって、第二次覚せい剤乱用期よりもさらに高年齢化した覚せい剤使用障害者に対してのロールシャッハ法研究が不足している。また、危険ドラッグに示される日本の流行状況に大きな変化があったことを考えると、危険ドラッグ使用障害者に対しての臨床上の特徴を明らかにする投映法研究は十分ではなく、これらの点をより明らかにすることが望ましい。

また、先行研究では薬物使用障害の病理をロールシャッハ法上から明らかにしようとする研究が多数を占めていた。薬物使用障害に対する投影法を用いた研究では、薬物による障害の程度を明らかにするだけでなく、投映法を用いて個人のテーマ性を読み取る試みも、薬物使用障害を抱える個人へのアプローチにつながる研究となると考えられる。

文 献

- 阿部 完市 (1981). LPG (ブタンガス) 依存の一例について アルコール研究と薬物依存, *16*(4), 182-183.
- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 4th ed. text revision*. Washington, DC: American Psychiatric Press.
(アメリカ精神医学会 高橋 三郎・大野 裕・染矢 俊幸 (訳) (2002). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.)*. Washington, DC: American Psychiatric Association.
(アメリカ精神医学会 高橋 三郎・大野 裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Australian Institute of Health and Welfare (2017). National Drug Strategy Household Survey 2016: detailed findings. Drug Statistics series no. 31. Cat. no. PHE 214. Canberra: AIHW.
- Axelrod, P., & Kessel, P. (1972). Residual effects of LSD on ego functioning: an exploratory study with the Rorschach test. *Psychological Reports, 31*, 547-550.
- 馬場 史津・門倉 真人・牛島 定信 (1999). 有機溶剤嗜癖者のロールシャッハ反応 臨床精神医学, *28*(6), 663-670.
- Blatt, S. J., & Berman Jr, W. H. (1984). A Methodology for the Use of the Rorschach in Clinical Research. *Journal of Personality Assessment, 48*(3), 226-239.
- Blatt, S. J., Berman, W., Bloom-Feshbach, S., Sugarman, A., Wilber, C., & Kleber, H. D. (1984). Psychological assessment of psychopathology in opiate addicts. *Journal of nervous and mental disease, 172*(3), 156-165.
- Blatt, S. J., & Berman, W. H. (1990). Differentiation of personality types among opiate addicts. *Journal of personality assessment, 54*(1-2), 87-104.
- Center for Behavioral Health Statistics and Quality (2017). 2016 National Survey on Drug Use and Health: Detailed Tables Substance Abuse and Mental Health Services Administration, Rockville, MD. Retrieved from <https://www.samhsa.gov/data/sites/default/files/NSDUH-DetTabs-2016/NSDUH-DetTabs-2016.pdf> (May 22, 2018).
- Cipolli, C., & Galliani, I. (1987). Addiction time and intellectual impairment in heroin users. *Psychological Reports, 60*(3, Pt 2), 1099-1105.
- Cipolli, C., & Galliani, I. (1990). Addiction time and value of z indicators in Rorschachs of heroin users. *Perceptual and Motor Skills, 70*, 1105-1106.
- Cipolli, C., & Galliani, I. (1988). Negative movement responses in Rorschachs of heroin users. *Perceptual and Motor Skills, 67*(1), 114.
- Dougherty, R. J., & Lesswing, N. J. (1989). Inpatient Cocaine Abusers: An Analysis of Psychological and Demographic Variables. *Journal of Substance Abuse Treatment, 6*(1), 45-47.
- European Monitoring Centre for Drugs and Drug Addiction (2018). European Drug Report 2018: Trends and Developments, Publications Office of the European Union, Luxembourg.
- 福井 進 (1993). 覚せい剤乱用の現状と対策 柳田 知司・辺見 武光(編) 覚せい剤依存症 第2版(pp. 137-162) 中外医学社
- 船田 正彦 (2014). 薬物依存形成の脳内メカニズム (特集 くすりを正しく使えない人たち: 医薬品の乱用・依存の理解とサポート) 月刊薬事=The pharmaceuticals monthly, *56*(10), 1479-1482.
- 船田 正彦 (2016). 危険ドラッグの有害作用: 依存性と細胞毒性 (特集 依存症の分子病態解析) 脳 *21, 19*(1), 43-46.
- 五味 久美子 (1992). ブタンガス依存者のロールシャッハ反応 ロールシャッハ研究 *34*, 107-121.
- 後藤 平 (1960). 慢性覚醒剤中毒長期入院例の臨床——特に分裂病との比較—— 精神神経学雑誌, *62*(1), 163-176.
- 郷古 英男 (1977). 有機溶剤吸入少年について -I- その実態と心理的・社会的背景 児童精神医学とその近接領域, *18*(3), 127-140.
- 橋本 謙二 (2007). 薬物依存の脳画像解析と臨床遺伝

- 学的研究 (特集 精神疾患の脳画像解析学と分子生物学の統合) 分子精神医学, 7(3), 245-248.
- 細木 照敏・村田 明・滝沢 和盛 (1966). 女子麻薬中毒者のロールシャッハ・テストによる研究 笠松章・逸見 武光・滝沢 和盛 (編) 「薬物乱用の臨床疫学」日米共同科学研究による薬物乱用に関する研究 249-255, 医歯薬出版
- 伊豫 雅臣・山崎 統四郎 (1992). 薬物依存と脳画像解析 精神医学, 34(8), 875-879.
- 上條 吉人 (2015). 危険ドラッグ関連の救急搬送患者の特徴と課題 公衆衛生, 79(4), 233-236.
- 片口 安史 (1987). 改訂 新・心理診断法 ——ロールシャッハ・テストの解説と研究—— 金子書房
- 加藤 元一郎・吉野 相英・和田 清・洲脇 寛 (1993). 嗜癖 (Addiction) について——その衰退と復活 白倉 克之・樋口 進・和田 清 (編) アルコール・薬物関連障害の診断・治療ガイドライン (pp. 22-24) じほう
- 小林 豊生・福居 顕二・早川 滋人・古賀 恵理子・小野 泉・福居 義久・中島 照夫 (1995). 慢性有機溶剤乱用者の心理特性について アルコール研究と薬物依存, 30(5), 358-366.
- 郡 美次 (1954). ロールシャッハ・テストによる覚醒剤使用少年と非使用少年の比較 四国矯正科学, 4, 4-10.
- Kornetsky, C. (1954). Relationship between Rorschach determinants and psychosis in barbiturate withdrawal syndrome. *A.M.A. archives of neurology and psychiatry*, 72(4), 452-454.
- 栗林 正男 (1955). 覚醒アミン中毒者のロールシャッハ・テストに関する研究 精神神経学雑誌 57(7), 1-8.
- Lesswing, N. J., & Dougherty, R. J. (1993). Psychopathology in alcohol- and cocaine-dependent patients: a comparison of findings from psychological testing. *Journal of substance abuse treatment*, 10(1), 53-57.
- 松井 一裕 (2018). 危険ドラッグ使用者のロールシャッハ法に表れた思考過程の問題 心理臨床学研究, 35(6), 651-656.
- 松本 俊彦 (2011). アルコール依存症と嗜癖概念—DSM-5 ドラフトを受けて (特集 アルコール依存症の展開) 日本精神科病院協会雑誌, 30(4), 298-305.
- 松本 俊彦 (2014). 診断概念の歴史 神庭重信 (総編集) DSM-5を読み解く——2 統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群, 物質関連障害および嗜癖性障害群—— (pp. 107-120) 中山書店
- 松本 俊彦・伊藤 翼・高野 歩・谷淵 由布子・船田 大輔・立森 久照 (2017). 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成28年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者: 嶋根卓也)」総括: 分担研究報告書, 101-136.
- 松本 俊彦・高野 歩・谷淵 由布子・立森 久照・和田 清 (2015). 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「[脱法ドラッグ]を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究 (研究代表者: 和田 清)」総括: 分担研究報告書, 95-128.
- 松本 俊彦・立森 久照・谷淵 由布子・高野 歩・和田 清 (2014). 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「[脱法ドラッグ]を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究 (研究代表者: 和田 清)」総括: 分担研究報告書, 95-105.
- 松岡 正明 (1986). 「ロール・シャッハ」を描いた喘息薬嗜癖の女性——絵の先生の死と悲しみのストーリー— 精神研・ロールシャッハ事例研究, 4, 17-40.
- 松岡 正明・廣瀬 久昭 (1986). 精神分裂病, 心因反応, 覚醒剤の影響, 詐病の鑑別が問題となった一例——ロールシャッハ・テストとカロ・テストによる再検査——精神研・ロールシャッハ症例研究, 7, 29-47.
- Musshoff, F., Madea, B., Kernbach-Wighton, G., Bicker, W., Kneisel, S., Hutter, M., & Auwärter, V. (2014). Driving under the influence of synthetic cannabinoids (“Spice”): a case series *International journal of legal medicine*, 128(1), 59-64.
- 小田 晋 (1969). 非行少年における有機溶剤酩酊の精神医学的研究 精神医学, 11(11), 49-56.
- 小川 俊樹 (1987). 覚醒剤中毒者のロールシャッハ反

- 応——精神分裂病との鑑別をめぐって 筑波大心理学研究, No. 9, 113-119.
- 大澤 栄・石川 到覚・幸田 実 (2004). 薬物依存症者の人格傾向に関する実証的研究 アディクションと家族, 27(3), 304-311.
- Pinheiro, R. T., Magalhães, P. V. S., Wagner, A.V., Pinheiro, K. A. T., Da Silva, R. A., & Souza, L. D. (2008). Psicopatología de pacientes dependientes de cocaína en una comunidad terapéutica. *Psychopathology of cocaine dependent patients in a therapeutic community. Adicciones*, 20(1), 73-80.
- Pinheiro, R. T., Sousa, P. L. R., Silva, R. A., Horta, B. L., Souza, R. M., & Fleming, M. (2001). Cocaine addicts and their families: an empirical study of the process of identification *The International Journal of Psychoanalysis*, 82(2), 347-360.
- Piotrowski, Z. & Lowis, N. D. C. (1950). An experimental Rorschach diagnostic aid for some forms of schizophrenia. *American Journal of Psychiatry*, 107(5), 360-366.
- 関 英馬 (1964). ヘロイン嗜癖者の人格研究——生活歴と心理テストによる考察 矯正医学, 13(4), 12-30.
- Silverman, L. H., & Silverman, D. K. (1960). Womb fantasies in heroin addiction: A Rorschach study. *Journal of Projective Techniques*, 24, 52-63.
- 嶋根 卓也・大曲 めぐみ・和田 清・邱 冬梅 (2016). 薬物使用に関する全国住民調査。平成27年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者: 嶋根 卓也)」分担研究報告書, 7-166.
- 嶋根 卓也・邱 冬梅・和田 清 (2018). 薬物使用に関する全国住民調査 (2017)。平成29年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究 (研究代表者: 嶋根 卓也)」分担研究報告書, 7-148.
- 空井 健三 (1973). 麻薬嗜癖受刑者の人格研究 矯正医学, 21・22 (1-4), 1-11.
- 空井 健三 (1974). 嗜癖について 水島 恵一・台利夫・空井 健三 (編) 臨床心理学講座 (6) 青年の心理臨床 (pp. 133-144) 誠信書房
- 空井 健三 (1975). 麻薬受刑者の人格研究 ロールシャッハ研究, 17, 1-23.
- 洲脇 寛 (2004). 嗜癖行動障害の臨床概念をめぐって 精神神経学雑誌, 106(10), 1307-1313.
- 高橋 雅春 (1958). 非行少年のロールシャッハ反応. 西京大学学術報告, 2(2), 141-148.
- 谷淵 由布子・松本 俊彦 (2015). 危険ドラッグをめぐる諸問題 精神医学, 57(2), 105-117.
- Templeton, G., & Spruiell, V. (1958). Methedrine inter-views: clinical and Rorschach studies. *Psychiatric Quarterly*, 32(4), 781-795.
- Tori, C. D. (1990). Homosexuality and illegal residency status in relation to substance abuse and personality traits among Mexican nationals. *Journal of Clinical Psychology*, 54(1-2), 160-9.
- Tucker, G. J., Quinlan, D., & Harrow, M. (1972). Chronic hallucinogenic drug use and thought disturbance. *Archives of General Psychiatry*, 27(4), 443-447.
- 梅本 椒子 (2005). 覚せい剤を乱用した少女たちのロールシャッハテスト. 比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター年報, 1, 3-10.
- Vanem, P.-C., Krog, D., & Hartmann, E. (2008). Assessment of substance abusers on the MCMI - III and the Rorschach. *Scandinavian Journal of Psychology*, 49(1), 83-91.
- 和田 清 (2000). 依存性薬物と乱用・依存・中毒——時代の狭間を見つめて——星和書店
- 和田 清・邱 冬梅・嶋根 卓也 (2014). 薬物使用に関する全国住民調査。平成25年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究 (研究代表者: 和田 清)」分担研究報告書, 17-94.
- 和久田 智靖 (2014). 物質関連および嗜癖障害 森 則夫・杉山 登志郎・岩田 泰秀 (編) 臨床家のための DSM-5 虎の巻 (pp. 107-113) 日本評論社
- Weiner, I. B. (1998). Principles of Rorschach Interpretation. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. (ワイナー, I. B. 秋谷 たつ子・秋元 倫子 (共訳) (2005). ロールシャッハ解釈の諸原則 みすず書房)
- World Health Organization (1957). Expert Committee on Addiction - Producing Drugs. WHO Technical Report Series, 116.
- World Health Organization (1992). The ICD-10 Classification of Mental and Behavioral Disorders: Clini-

薬物使用障害に関する投影法を用いた研究の概観

cal descriptions and diagnostic guidelines, World Health Organization.

(融 道男・中根 允文・小見山 実・岡崎 祐士・大久保 善朗 (監訳) (2005) ICD-10 精神および行動の障害:臨床記述と診断ガイドライン(新訂版), 医学書院)

山脇 成人・嶋谷 勝弘・津久江 一郎 (1982). 有機

溶剤乱用者に関する心理学的考察—ロールシャッハ・テストによる広島医学, 35(6), 723-727.

柳田 知司 (1975). 薬物依存関係用語の問題点 臨床薬理, 6(4), 347-350.

柳田 知司 (1992). 薬物依存研究の展望—精神依存を中心に 日本薬理学雑誌, 100(2), 97-107.

ABSTRACT

Review of studies using projection methods on substance use disorders

Kazuhiro MATSUI, Syoko KONO and Miyako MORITA

The spread of stimulant drugs has increased in Japan since the end of the Second World War, and today it has become a problem for clinical psychiatry. Moreover, the average age of contemporary stimulant drug users tends to be higher because these drugs are no longer used by only young people. Furthermore, accidents related to the use of synthetic drugs have happened recently in Japan. Nevertheless, the spread of drugs is still narrower in Japan compared to other countries. Stimulant drugs have harmful effects on the mind and the body because they affect and activate the reward system of the brain. Various assessments are conducted for evaluating substance use disorders. Among these assessments, one study used Rorschach techniques as a projective method. Fewer studies using projective methods have been conducted with stimulant drug users than with patients having mental illnesses in countries where these drugs are more widespread than Japan. We searched for domestic and international literature and reviewed studies on problem substances. We identified possibly studies on substance use disorders by referring to “the List of literature on Rorschach technique in Japan,” and selecting Japanese studies with substance use-related titles by searching the Japanese literature in the Citation Information of NII (Cinii), as well as the English literature in PubMed databases. Thirty eight studies were selected for analysis in addition to the literature separately selected by the author. There were 20 studies in Japanese on Rorschach techniques for substance use disorders under the topic of stimulant drugs, which was the largest number. There were also 18 international studies on Rorschach techniques for substance use disorders. Among these studies, seven had mainly investigated Opioids (opium), which was the largest number. A broad overview of these domestic and international studies indicated certain differences based on the substance that was used. Nevertheless, there were common problems such as interpersonal relationships and reality-testing and thought disorder. Moreover, interpersonal relationship problems and pathology comparable to schizophrenia were also reported. In addition, the Rorschach techniques indicated certain remaining pathology even after the psychiatric symptoms have disappeared. Studies using the Rorschach techniques with stimulant drug users and the use of projective methods to investigate and identify clinical characteristics of synthetic drug users remain insufficient when considering the higher average age of stimulant drug users and the significant change in the spread of synthetic drugs in Japan. It would be desirable to further clarify the above issues in the future by studies using projective methods. It is also suggested that research should not only clarify characteristic of substance use disorders but also lead to a treatment approach for individuals with substance use disorders by interpreting individual themes by using projective methods.

Key words: substance use disorder, Rorschach, projective method, addiction